

私の稀観本ノート

その30

- 「忘れられた日本人」
宮本常一著
椎窓 猛



去る5月27日、アクロス福岡で開催の「宮本常一生誕100年フォーラム」に、発起人の長岡秀世氏の案内をいただき参加した。改めて感銘したのは、民俗学者宮本常一に関心を寄せる人々がこれほどいられたのかということであった。4000日、16万キロ、日本の農山漁村、そして島々をめぐり、「旅する巨人」といわれた宮本常一を学ぶことによって今日の日本の状況を見なおそうという良識にほかならないと思われる。

私がこの宮本常一の著書に親しむようになったのも、へき地、山間地に居をかまえていることが大きな要因である。「村の寄りあい」についての宮本常一の記録を読みすすめていると、いちいち首肯されてくる。

「暗夜、胸に手をおいて」考えなされ、足もとを見て物をいいなされと説く村の老人、お堂で集まっただの話題、村の文化伝承、子どもの躰、食、住にかかわることなど再考を促す糸口を無数に提供されている。

こうした糸口を発起した長岡さんに私は深く脱帽している。(館長)

こうした糸口を発起した長岡さんに私は深く脱帽している。(館長)

黄櫨の会・自分史図書館だより



ya

No. 30

2007.6.10

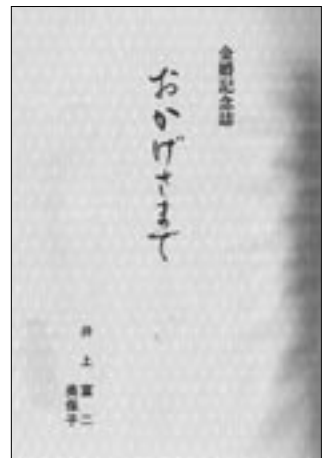
平成19年6月10日 筑後市野町428-8
〒833-0032・TEL 0942・53・8122

これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歓のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。

- 金婚記念誌

おかげさまで

井上 富二
美保子



「実は、私共この春金婚式を迎えたのを記念して、ささやかな冊子を作りました。50年という節目を機に子や孫たちに

私たちの人生を残しておきたいという思いでまとめた全くの内輪の記録、他人様に見てもらおうつもりのもではなかった」ところが内容が興味深いといった声を頂き、つい貴館にもという便りが添えられての恵贈である。

井上さんご夫妻は、三井郡一帯の中学校に教職に在られた方で、ご主人は大原中学校長を最後に退職(昭62)奥さまは3年さきの退職後、北野短歌会などに参加、ほのぼのの心温まる夫婦二人三脚の人生史である。

伯耆富士の麗姿車窓に仰ぎつつ
女孫にまみゆる旅を急ぎぬ

ふるさとの筑後河畔に咲き初めし
菜の花うれし孫の名につく

はなみずき咲き満つる都に夫と来て
生まれしばかりの女孫抱く

美保子

受贈図書紹介 ⑨

順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。
あしからずご了承下さい。

- 和して流れず……………都築 貞枝聞書 福岡市
- 歌集青き末練……………有田 秀子 長崎市
- 歌集若狭の海……………奥本 守 福井県
- 青の残照……………氏原三千代 八代市
- おやじの子育て……………飯田 栄彦 甘木市
- 写真集筑後黒木……………黒木町教育委員会 黒木町
- 海碧き島よりふるさとへ……………倉ノ下和代 上陽町

自分史図書館

入館無料
開館 午前9時～午後5時
閲覧希望の方は予め電話で
ご確認下さい。
貸し出しはしていません。



〒833-0032 筑後市野町423-8 TEL・FAX 0942-53-8122
西鉄バス野町停留所より徒歩5分
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan



○ちぎれ雲
永久に帰らざりし家族らへ

岸田典子

岸田典子さんは熊本生まれの大阪市在住。

一家は敗戦まぢか昭和20年4月、ソ連との国境に近い、東稜県八面通という邑に來た。ほどなくソ連進攻一瞬にして家族は霧散。それからの人生行路が点描されている。

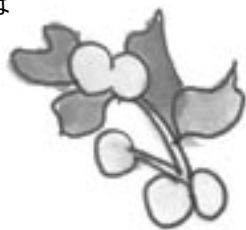
母の生涯も記述されているなかで目にとまったのが熊本県立第一高女時代、寮生活の一件。寮をぬけだし焼薯買いに先輩からやらされる。ふと見ると壁ぎわに舎監の先生が立っていられた。熱い包みを抱きしめたままうつむいていると、何も言わず見逃された。その先生があゝ「更けゆく秋の夜旅の空のわびしき思いに一」の訳詩をされた犬童球溪先生であった一。こんなエピソードは誰ぞ知る。



○この道 泣いて笑って
藍原益子

藍原益子さんは、神奈川で「マッコー保育園」経営。新日本歌人協会会員。保育体験人生史といった内容。

保母の口調そっくり真似て説し居る三歳児は大人を写し居るなり
一歳の「ななみ」に絵本読みみかす「ふみや」三歳あやしなながらに
黙々と跳び箱めがけて走る子に
声援の声止みて見守る
それぞれが作りしぶんぶんごまなればポケットに深くしまひて帰る



○我が人生の歩み
辻村敏郎

辻村さんは大正8年の生まれ。石川島播磨重工業勤務31年。以後、南方戦線鎮魂、慰霊の旅をつづけられたその足跡の記録である。

なかでも特筆すべきは、シンガポール日本人墓地年表を作成されている項である。

「シンガポールには、約2万人の日本人が進出し、観光客が押しかけているのに、戦没者慰霊碑に詣でる人は少ない」これでいいのかと辻村さんはこの著書を通して警鐘を鳴らされている。明治の文人二葉亭四迷終焉の碑が昭和4年この地に建立のことなど多くは知られていないのではないかと。



○肥後街道榎津小保と吉原家の創建

著者は石橋泰助氏。大川市の文化財専門委員。

まずこの書を手にとって表紙の意匠の典雅な味わいに感銘した。あとがきに小保町の森田篤氏とあった。

まえがきに著者は「榎津が久留米領、小保が柳川領という藩境の町でもあり、文化9年(1812)の伊能忠敬の測量日記に、久留米・柳川石垣界と記された18本の石列も遺っている」と、忘れ去られようとする街道沿いの町並について、ていねいな発掘がなされている。

猪口萬右衛門の踏車発明談など貴重な記録ではないか。

編集掌記

▼この6月で『ya』も30号を数える。自分史図書館へのご惠贈。感謝の思いこめ、また未知の方とのめぐりあい、貴重な人生体験を拝聴する思いで、この号まで館長として

の使命感を重ねて編集してきた。そろそろ「私はこの本が忘れられない」といった投稿もあつていいような気がする。▼5月末日、黒木町渡内小の堤先生より夏季文学研修の場について紹介してほしいとの依頼で、小郡市の野田宇太郎文学資料館をふたりで訪ねた。特別に書庫も見せていただいたが、古い雑誌一冊についてもていねいな保存の方法に抛られていることが教えられた。名実ともにユニークな近代文学館として高く評価されているゆえんが伺われた。

(自分史図書館長 椎窓)